

# 学生の「学びの場」の存在について

## — コンヴィヴィアルな学び合いのモデルの検討 —

野村林太郎\*, 永野 直\*, 皆月昭則\*\*, 林 秀彦\*\*\*

本稿ではコンヴィヴィアルな学び合いについて触れるとともに、その知識創造のメカニズムについて考察する。またコンヴィヴィアルな学び合いの持つ効果について、実践コミュニティ事例の分析に基づいてモデルの構築を試みる。モデル構築においては、共分散構造分析によるパス図を作成し、基本モデル、パスモデル、検討するモデルの適合度指標の比較を明らかにする。これまでに可視化が容易ではなかった学びの場におけるコンヴィヴィアルな学び合いのモデルを明らかにすることで、さらなる可能性を導いた。

[キーワード：学び、学び合い、コンヴィヴィアル、アルバイト]

### 1. はじめに

最近、互いに教え、互いに学び合うといった「学び合い」といった言葉が、新聞などでもよく取り上げられている。その広がりや、初等中等教育、高等教育、生涯教育などの学びの場が必要とされており、次第に重要性が認識され、また注目も集めている。例えば、『学び合い』は、先駆的に上越教育大学の西川純氏によって提唱されており、学び合う授業は全国的な展開も行なわれ始めている。小学校の段階から『学び合い』を意識し実践していくことで協調性やコミュニケーション力などをしっかりと身につけ、学習にも繋がっていく活動である[2]。また一方で、我々は主に大学生の学びを対象として、学び合う空間をデザインし、その実践を「コンヴィヴィアルな学び合い」を理念として導出した活動を実践してきた[3][5]。本稿では、主に大学生の学び合いを対象として、その実践観察と評価アンケート結果に基づき、学びの場のモデルを検討する。

### 2. 大学生の学び

大学生の「学び」は、小中学生に比べ活動範囲が広く、大学の内外を通して、様々な活動において形成されている。授業はもちろんのこと、ゼミ、サークル、部活動、ボランティア活動、さらには、企業でのインターンシップ、アルバイトなど、学びの「場」は多岐にわたる。これらの「場」を通して、新たな知の獲得・蓄積に始まり、知を活用できるような環境に整理して、新たな知を創造するダイナミックな知識変換を繰り返すことによって、大学生の「学び」は豊かなものになる。

しかし、これらの一連のサイクルは必ずしも自然発生的に形成されるものではなく、むしろ学びの「つまずき」が繰り返されることによる負の連鎖によって、知の創造

に至るプロセスが遮断されるケースもある。例えば、講義形式の授業における画一的な学びの方法では、学習のつまずきの連鎖によって、授業の理解度が低くなるという悪循環に陥るケースがある[3]。

すなわち、学生には大学の内外で学ぶ機会が豊富にあるにも関わらず、知識創造[4]に至る一連のサイクルの形成に失敗することで学ぶ機会を見逃し、知を効果的に活かすことができない問題が生じることがある。従って、知の獲得から知の創造に至るまでのプロセスには、このように何らかの妨害要因が発生することは否めないが、それが何であるのか、あるいは、そのようなプロセスにおける知識変換を従来から提唱されたモデルで説明できるのか、実践的な学びの場の分析を通して考察する余地がある。そして、これらの分析を通して知識創造のための学びの場を豊かにする学習環境を構築できれば、これまで見逃されてきた学びの場の活性化が起こり、さらなる知識創造の可能性も広がるのが期待できる。このような仮説をもとに、我々は大学生の学びの場を対象として、「コンヴィヴィアルな学び合い」を理念においた活動を展開している。

### 3. コンヴィヴィアルな学び合いとは

まず、「コンヴィヴィアル（もしくはコンヴィヴィアリティ）」とはイヴァン・イリイチによって唱えられた思想である。その日本語訳としては「自立共生」「節制ある楽しみ」「共愉」などがあるが、どれも人びとの生き生きとしている様を表している。本研究においては「共愉」という意味合いが強いが、「コンヴィヴィアル」という言葉の持つ雰囲気や損なわないため、特に日本語訳引用はしない。

\* 鳴門教育大学 大学院 修士課程 2年 教科・領域教育専攻 生活・健康系コース(技術・工業・情報)

\*\* 釧路公立大学 情報センター

\*\*\* 鳴門教育大学 大学院 自然・生活系教育部

また、本稿において「学び合い」とは2者間で「互いに教え、互いに学ぶ」、知識創造・知識伝達プロセスである[3]。さらに、知識という言葉は、固定化された知識に限らない動的な知識、すなわち、いわゆる知恵、暗黙知を含めた概念として使用する。

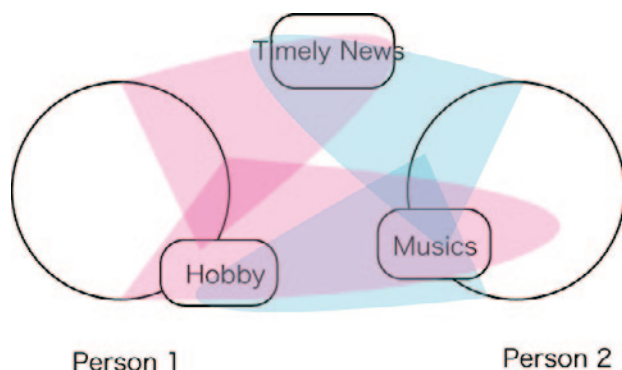


図1 2者間のコンヴィヴィアルな学び合い

「学び合い」は互いの持っている経験を、興味や関心を通して伝達し合うことで、互いに持っている知識・経験が広がっていく効果を持っている。コンヴィヴィアルな学び合いとは「楽しみながら互いに教え、互いに学ぶ」知識創造のプロセスとしてみなすことができる(図1)。

図1はコンヴィヴィアルな学び合いを図化したものである。コンヴィヴィアルな学び合いを通して、Person 1の持つ知識とPerson 2の持つ知識の形容が変化し、より大きなものになっていることがわかる。ここで注目すべき点は、知識の拡大が共通部分だけでなく、それぞれ固有で特徴的に成長している部分が存在するという点である。これはコンヴィヴィアルな学び合いを通して、知識が、互いのコミュニケーションの中から、一つの知識を抽出するだけでなく、「場」という周囲の環境から様々な要素を含み有機的に成長していることを意味している。また「学び合い」については、一人で実践できるものではなく、2者間以上のコミュニケーションに依存する前提がある。我々は、このコミュニケーションを活性化させるための学習環境をデザインしており、コミュニケーションや人と人とのつながりが比較的弱い活動を対象に実践することを想定している。図2に示すようにコンヴィヴィアルな学び合いに参加する者が増えれば、知識の拡大可能性はそれに伴って増大する。コンヴィヴィアルな学び合いは図3のようにジャンルに偏ることなく、自然発生的に起きる。図3の「場」で起きた学び合いのテーマは「教育について」「音楽は人生を変えるか」「料理について」「夢や目標の設定について」など様々であり、そのテーマを基に多岐にわたる議論から学び合いが行なわれていた。

大学生の学びの場は、これまで述べたように、授業、サークル活動、アルバイトなど多様であるが、実践観察ではコミュニケーションが少ないと想定できるアルバイトの「場」を選定して、学習環境の構築と学びの考察した。これによって、ダイナミックな大学生の知の創造がどのようにして生まれているかを、いくつかの実践コミュニティ事例で収集した観察データを基にして分析し、コンヴィヴィアルな学び合いのモデル化を試みていく。

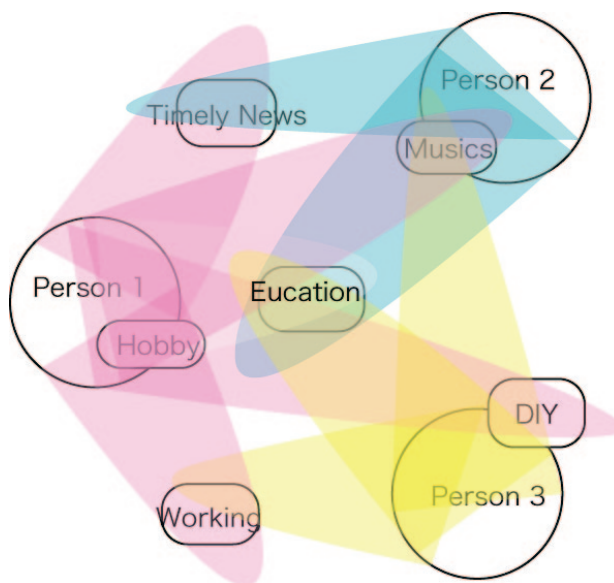


図2 3者間のコンヴィヴィアルな学び合い



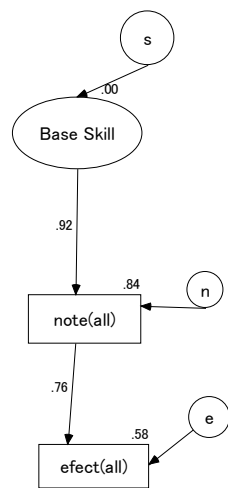
図3 コンヴィヴィアルな学び合いの「場」の雰囲気

#### 4. 実践観察からの学習モデルの構築

我々はコンヴィヴィアルな学び合いがアルバイトにおける学び(業務についての改善、気配りなど)に繋がると詳細仮説をたて、2008年から2009年にかけてアルバイトの場においてコンヴィヴィアルな学び合い(名称は「ア

アルバイト会議」と「アルバイト・ノート」)を実施した[5].そして,アルバイトの場を観察調査し,アルバイトスタッフにアンケートを実施して,その結果を基に,コンヴィヴィアルな学び合いの効果についてAMOSによる共分散構造分析を試みた.図3はアルバイト・ノートを導入した場合の業務改善を,図4はアルバイト・ノートとアルバイト会議を導入した場合,図5は図4に学び合いのステップを導入した場合をそれぞれ示したものである.図示内のNoteはアルバイト・ノート,Meetingはアルバイト会議,Effectは業務の改善をそれぞれ表している.

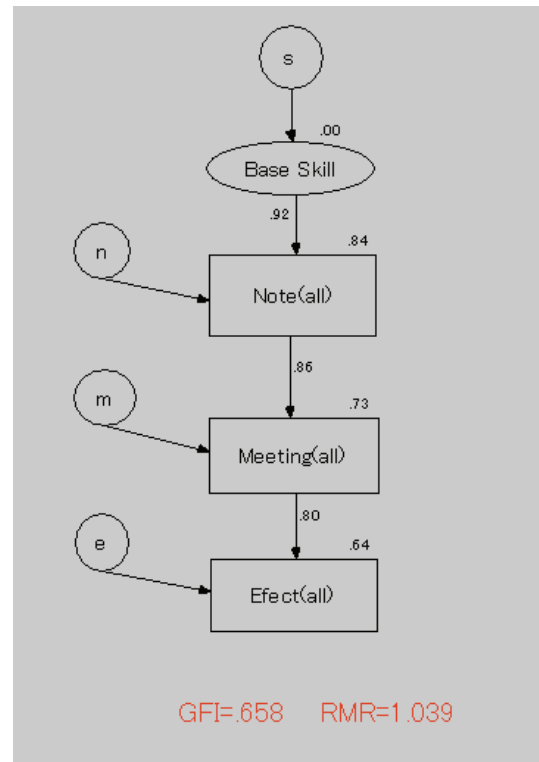
図4の基本モデルはアルバイトスタッフの持つ基本スキル(Base Skill)からの業務遂行であり,「アルバイト・ノートを導入したことで情報交換が推進されて業務改善に繋がる」ということをモデル化したものである.AMOSにおける当てはまりを表す適合度指標であるGFIとRMRがそれぞれGFI=0.501,RMR=1.537となり,当てはまりが低いモデルであるという結果となった.図4におけるパスの方向性はアルバイト・ノートとアルバイト会議を取り入れ,業務の改善に繋がることを示唆している.基本モデルに比べ,より業務の遂行が改善されることが予測されるモデルとなっているが,GFI=0.658,RMR=1.039となり,こちらも当てはまりが低いモデルであることを示唆している.



Base Model(ALL)

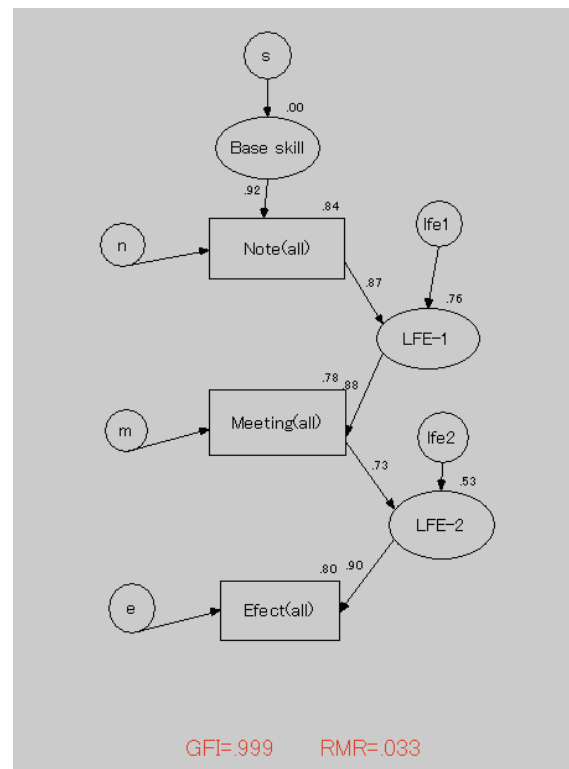
GFI=.501  
RMR=1.573

図4 基本モデル (Base Model)



GFI=.658 RMR=1.039

図5 パスモデル (Pass Model)



GFI=.999 RMR=.033

図6 2LFE モデル

そこで,パスモデルに学び合い要素を取り入れたモデルの構築を試みた(図6).図6内の”LFE”は“コンヴィヴィアルな学び合い”要素である.適合度指標は,

GFI=0.999, RMR=0.033 となり, 基本モデルやパスモデルと比べると格段に適合度が向上する結果になった。よって, 図6の分析結果より, アルバイト・ノートやアルバイト会議を導入する過程で, コンヴィヴィアルな学び合いが実践されることで, 従来よりも高い業務の改善に繋がると結論づけることが可能である。

## 5. おわりに : LFE モデルの可能性

本研究で取り上げた「アルバイト」の場は学生にとっていくつもある「学びの場」の一つにすぎないが, アルバイトの場におけるLFEモデルが結論示唆するように「コンヴィヴィアルな学び合い」は学びを促進させている。換言すれば, 他の学びの場においてその効果が持続的であれば, さらに学生の学びを促進することができるということである。

結論としては「コンヴィヴィアルな学び合い」は, 意欲的な姿勢を学生に身につけさせることができると言える。お互いにフォローし合うことでお互いに成長していくことができるという点では「切磋琢磨」という言葉が類似的関連性が高い。実践事例では, 新たな教育モデルによって知の創造を実現する方法論を具現化しており, 特に, 学ぶ対象である大学生の特性について, 互学互修型[6]の教育モデルの前提条件として必要である自学自習が必ずしも完成されていることを要請しておらず, コンヴィヴィアルな側面がそれを補っており, 多くのタイプの学生を対象にできる点で汎用性が高く, さらなる可能性を見出すことが期待できる。

## 参考文献

- [1] 西村 純 : 学び合いの仕組みと不思議—ちよつとのことでクラスは変わる, 東洋館出版社, 2002. 02
- [2] 佐賀新聞, 2010. 1. 30
- [3] R. Nomura, N. Nagano, T. Asai, A. Minazuki, H. Hayashi: Lounge Activity in Higher Education - Learning from Each Other -, KICSS2008, pp. 156-163, 2008
- [4] 野中 郁次郎, 竹内 弘高(著), 梅本 勝博(訳) : 知識創造企業, 東洋経済, 1996
- [5] 野村林太郎, 永野直, 皆月昭則, 林秀彦: 大学生の学びを対象とした知識創造のための学習環境-ラウンジ: コンヴィヴィアルな学び合い-, 日本創造学会論文誌 Vol. 13, pp. 15-34, 2010. 01
- [6] 妹尾堅一郎, 白須礎成, 土屋香菜 : 学習コミュニティを支えるメディア環境 —社会調査法の6年間に見る学習環境の変容, コンピュータ&エデュケーション, 柏書房, Vol. 13, pp. 123-131, 2002